

うたごよみ

曾於文藝

「題字」
末吉文化協会会員
瀬戸口 淳 氏

俳句

千草俳句会

つれだちて一と日の旅や五月晴
齊藤 忍

風立ちてくるくる廻る矢車かな
高橋 てる女

夏菊の香りほのかに匂いけり
浜田 郁子

吾が住居見ゆるかぎりの若葉か
な

川崎 綾子

夏服の学生軽ろく会釈する

岩重 みどり

目に見えぬ程の影あり水馬
中島 玉水

短歌

末吉短歌会

容赦なく摘果されたる命継ぎ庭
のさくらんぼ熟れてゆかむか
大森 澄子

かつこよく歩こうなんて夢の夢
こころもとなし老いへの準備
小野 清子

「沈黙の春」となりたり原発の
事故の町には人影絶えて
宝蔵 弘二

大隅短歌会

帰省せし息の手を借りて苦瓜の
棚を作りぬ夢を架けつつ
米沢 正敬

咲きほこる桃の小枝をひと抱え
器に盛りて節句を寿ぐ
本田 澄江

七分搗きに精米したる新米の胚芽
研ぐたび指よりこぼる
西山 美代子

財部短歌会

五人の孫希望なす道をまっしぐ
ら未見届くるを頼りに生きなむ
瀬戸口 芳子

競ひしてつくしんぼうの背比べ
ぐんと伸びよとそと手を添ふ
祝迫 道雄

春めいて一人暮らしの古い人は
シヨツピングカー押ししてリハビ
リ
児玉 次雄

庭先に咲き極まれる雪柳茫茫と
してなだるる覚ゆ
富山 治雄

やや固しカメラの前の新入児父
母の与へし名前を胸に
川俣 若

麗らかな花かげに集ふ老い仲間
弁当かこみくり言はずむ
井上 澄子

茶の間にて強威の津波に慄きぬ
瞬時に呑まるる海浴ひの町
杉村 リカ

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

肥ゆい女房 素あやつぱい
余ゆ食つ

桐野 奈世

肉か余つ 血圧ちや高けち
医者か吐つ

田代 勝泉

国会いも 効の無議垂れが
余い放題

森山 厚香

大隅薩摩狂句会

今洗るた車め歯痒いか灰が積つ

山田 竜生

灰にすれば塵も減つとに焼かな
らじ

太良木 五徳

殺処分恨んぬ山ん灰で苛つ

神宮司 素水